

3月11日のこと

この度の東日本震災は、人間の叡智を超えた自然の力のものすごさを私たちに思い知らせてくれました。3月11日被災後初めてのテレビ報道の画面に映しだされた宮城県、岩手県、福島県、の被災の惨状に日本中のみんなが茫然自失、言葉を失いました。あれから3週間、新聞紙上、テレビで伝えられる個人個人の被災の様子は私の想像力を越え、自分自身の心のコントロールができなくなっています。何をしたらいいのか、ただうろうろしながら何とか被災された方たちの力になりたいと、センターの玄関脇に義援金箱を置いています。実家が宮城県や岩手県にある職員も数人います。それぞれが親族が無事という連絡のなかほっとしながら、郷里の方々の安否、被災の様子が分かり始めると、いても立ってもいられないという気持ちだと察しますが、いつもと変わらず、通常の業務に専念する姿に心が痛みます。

続いての福島原発事故による近隣の方々の避難、計画停電、3月11日の地震・津波の影響は尚拡大していています。

30年近く前、中村小学校訪問学級の母親グループの話し合いのなかで、大きな地震がきたら「娘（筋ジストロフィー）を抱いて座っています」と話した一人の母親の顔と言葉を思い出します。きっと11日に亡くなった方の中に、そして今まだ行方の分からない方たちの中に、「避難してください」と言うマイクでの呼びかけを聞きながら、歩くことのできない息子や娘、夫や妻を置いて逃げるができなかった人たちがきっといらしたと思います。どうかその方たちがせめて離れ離れにならないでいてくださったように、と祈りながら無念な思いがわいてきます。

私たちの横浜療育医療センターでは、計画停電が長引くと電気が必要な医療機器に支障がおき、命に関わる方がでます。自家発電用の軽油の手配に一時心配しましたが、なんとか万への備えができほっとしていますが、まだまだ予断が許せない状況下にあることに緊張しています。

今日本全体が「がんばれ東北！」と被災者の皆さんの思いに自分の思いを重ね心からのエールを送り、行動を起こしています。停電も、東北の方々のことを思うと苦にはなりません。逆にいかに電気を無駄に使っていたかが身にしみてわかりました。太陽の光の温かさ、月の光に感謝の気持ちも生まれました。

そして何よりも「生きて今在る」ことへの感謝、一日一日を大切に、もっと言えば一瞬一瞬を大切に生きることこそ「普通に生きること」であり、そこにもっとも大きな喜びがあることがわかりました。

横浜療育医療センター、たち、で暮らしている方々、地域療育センターあおばに通ってくる幼い方たち、その一つ一つの命をしっかり守ることが私たち法人の一番の使命だと言うことをしっかり自覚し、覚悟を新たにしたいと思っています。